

留学生に向けた日本文学の授業

—入門講義「日本文学Ⅰ」における作品の選択と表現活動—

香川 由紀子

要 旨

本稿では2019年度に実施した、名古屋大学国際言語センター全学向け日本語プログラムの入門講義「日本文学」について、作品の選択と学習者の表現活動および学習者の反応について報告した。留学生向けの文学の授業では、日本語運用能力が高い学習者を、読解に留まらず周辺知識を得て作品を味わい楽しむことに導くことが望まれる。そのためには教師の解説のみでなく、学習者が参加する活動が必要である。「日本文学」の授業ではこれに向けて、文化比較やジェンダーの観点から話し合いができる作品を近代文学を含めて選択し、表現活動として短歌の現代語訳を行った。学習者のアンケートからは、テーマが明確で平易な日本語で書かれた作品が読みやすいとは限らず、難解でも内容に共感し表現を味わっていることがわかった。古文や近代短歌を現代語訳する活動に関心のある学習者もあり、オノマトペや役割語など通常の日本語の授業で産出までは扱わない表現を、学習者が実際に使ってみる場にもできることが確かめられた。

キーワード

日本文学、作品の選択、表現活動、短歌、現代語訳

1. はじめに

本稿では、2019年度に実施した、名古屋大学国際言語センター全学向け日本語プログラムの入門講義「日本文学」の授業を振り返り、留学生に向けた日本文学の授業において重視した点を報告する。

名古屋大学国際言語センター全学向け日本語プログラムの入門講義「日本文学Ⅰ」「日本文学Ⅱ」は、「日本人学生を対象とした学部や大学院の講

義への橋渡しとして、またさらに専門を深めていくための導入教育¹⁾として位置づけられており、日本語能力試験2級程度の日本語力を備えていることが条件となっているが、実際に履修する学習者の日本語運用能力はそれよりも高い場合が多い。日本語能力は高い一方で、受講者は文学を専門とする学生ばかりではなく、日本文学に触れたことのない学生も混じっている。

このような留学生向けの日本文学の授業においては、文章の意味だけでなく日本文学そのものを理解すること、そして何よりも作品を味わい楽しむことに学習者を導くことが必要となる。二本松(2010:35)は、日本文学に関心を持つ留学生が、読解する能力においては高い水準に達していても、作品に対する理解は叙述されている本文を解釈するに留まり、作品に関わる周辺知識をほとんど認識していないことを指摘し、本文以外の、例えば時代背景などの知識を広げることが、文学研究を目指す留学生にとって性急に必要課題であると述べる。二本松の述べるように日本文学の理解には、作品の書かれた時代背景や日本文化を知ることが不可欠であり、そのためには教師の解説も大切であるが、学習者が作品や文化に対して考えたことを表出する活動が必要であると考え。また、作品を楽しみ味わうには、学習者が作品に入り込み、自分の視点で読んだと実感できる活動も必要である。

この目標に向けて、2019年度は、前年に試みて学習者の反応がよかった点は多少の変更を加えて引き続き取り入れると同時に、反省点として残っていた部分に留意し改善して授業を実施した。本稿では、この試みについて、「日本文学Ⅰ」における作品の選択と学習者の表現活動を中心に報告する。

2. 授業の概要

2-1. 授業目標

授業目標は、文章を読解するのみでなく、作品の背景を知り、表現を味わい、自らも考えることである。後述するが、学習者が一貫したテーマで

考えを発展させていけるよう、シラバスの授業目標には「日本文学の講読を通して表現や作品の背景を学び、ジェンダーや異文化受容の視点からも日本文化を考えること」と記載した。また考えたことは、ディスカッションやまとめシートへの記入を通して表出することを目指した。

2-2. 授業の方法

授業は全14回のうち初めの2回で上代から現代までの文学史を概観し、3回目以降は作品ごとに講読、解説、まとめとディスカッションを行った。ひとつの作品にかかる時間は作品の長さによって多少異なるが、手順は以下のとおりである。

(1) 受講者は事前に作品に目を通す

- ・作品は授業の前に自分で読み、わからないところを明確しておく。配布する資料は、旧仮名遣いを改め、漢字にふりがなをつけた。長編小説は主要な場面を抜粋した。

(2) 作家の背景、作風についての紹介

- ・学習者の国ではどのように評価されているか、翻訳されているかなどについて質問しながら、配布資料とパワーポイントで紹介する。

(3) 作品の講読と、言葉や文化についての解説、意見交換

- ・クラス内で作品を読み（音読を含む）、わかりにくい言葉や表現、作品に描かれた時代の日本の様子について解説する。作品に登場する風物や場所、登場人物の行動の意味を解説する際には視覚教材を用いる。解説を聞き、同時代の自文化と比較して意見交換する。

(4) 課題とディスカッション

- ・表現や内容に関する質問の答えや、文化的背景に対する意見や感想を書くまとめシートを作品ごとに課す。シートに書かれた答えや意見は整理して紹介し、新たな意見があればつけ加えられるよう、ディスカッションの場を設ける。

2-3. 受講者

2019年度秋学期「日本文学Ⅰ」の受講者のうち、最終的に出席率が80%を超えていたのは21名であった。内訳は日本語・日本文化研修コース（日本語・日本文化研修留学生のための1年間のコース）の学生11名、NUPACE（Nagoya University Program for Academic Exchange：名古屋大学短期交換留学受入れプログラム）日本語コースの学生8名（日本語・日本文化研修コースにも所属している学生を除く）、全学向け日本語プログラム（名古屋大学に在籍する外国人留学生（大学院生、研究生など）・客員研究員・外国人教師など、日本語学習希望者が受講できるプログラム）の日本語コースの学生2名である。全学向け日本語プログラムの受講者としては、出席は足りていないものの不定期に参加する受講者がほかに数名いた。

国籍は中国、台湾、香港、韓国、インドネシア、タイ、ウズベキスタン、スリランカ、イギリス、ノルウェー、ウクライナである。受講資格に「講義はすべて日本語で行っているため、日本語能力試験2級程度の日本語力を備えていることが条件となる」²⁾とあるが、受講者は皆、上級レベルの学生であった。

3. 留学生に向けた文学の授業における作品の選択

叙述された文の理解のみでなく、文化に触れ表現を味わうことを目標とした留学生対象の文学の授業では、どのような作品を選択すべきかが最初の課題となる。文学の授業で作品を選択する際には、学期を通して1冊を通読する、同じ作家の作品を複数読む、ジャンルを絞る、年代を限るなど、様々な方法がある。文学を専攻している学習者から触れたことのない学習者までが混在する留学生向けの授業においては、なるべく多くの作品に触れてもらいたいという考えから、まず、「日本文学Ⅰ」「日本文学Ⅱ」では複数の作品を扱うことにした。

作品の年代については、留学生からは現代日本文学を読みたいという要望があがる。海外でも人気がある作家の作品を日本語で読んでみたい、現

在の日本が映し出された作品を読みたいという希望に加え、現代作家の文章の書き方や表現が馴染みやすいという理由が考えられる。そのため「日本文学Ⅱ」では「家族のあり方」をテーマに据えてその変遷を辿りながら複数の現代の作家の作品を講読した。

しかし、作品を読んだことがなくても作家名や作品名だけは知っているというような近代文学作品について、日本に留学している学習者が知識として知っておいてもよいのではないか。特に近代の文学にはわかりにくい表現や馴染みのない文化の描写も多いため、自分ひとりで読書を楽しむ際を選択することはなくても、クラスで解説をして意見を交換しながら読むことで身近に感じることはできるのではないか。また、近代は西洋文化を受容し価値観が様々に変わった日本の転換期であり、近代を理解することは現代日本の理解にもつながるのではないか。このような考えから、「日本文学Ⅰ」では明治から昭和中期にかけての作家の作品を取り入れた。さらに様々な文体や表現に触れることを目指し、小説、随筆、短歌等、複数のジャンルにわたるよう作品を選定した。

西（2012：52）は、留学生向けの文学の授業報告で、前年度の反省点として、偏るのを覚悟のうえで「作家の文章力とジャンル（純文学、エンタテインメントなど）の横断」を重視、つまり「純文学を優先せず、大衆小説を含み時系列のバランスを顧みず、面白いもの、優れた作品を重視し」て作品を選んだ結果、留学生は「何が書いてあるのかは十分理解したのだが（露伴、鏡花を除く）、文章を楽しみ、文章のうまさを理解し、鑑賞し評価する余裕に乏しかった。テキスト選定の難しさを痛感した次第である。」と述べている。ここでは一回ごとの授業のテーマに沿って、泉鏡花、谷崎潤一郎、江戸川乱歩、坂口安吾、三島由紀夫、武田泰淳、橋本治、小林信彦、米澤穂信など多数の作家の作品が取り上げられており、学習者は幅広い文体、表現、内容に触れ、周辺の文化事項についても学ぶことが多かったであろうと思われるが、近代文学作品に関しては内容の理解さえも難しかった様子が窺える。

露伴や鏡花は文章を味わうという点から見れば取り入れたい候補にはあ

げられるが、上記のように難しいと感じる学習者もいると予想されることから、「日本文学Ⅰ」では近代文学作品を含む日本文学をまず身近に感じてもらうことに焦点をあて、日本以外でも広く知られている作家の作品を扱うことにした。またジャンルをまたいで複数の作品を扱うため、一貫したテーマを据えるのが望ましいと考え、留学生が読む点、近代は価値観が様々に変わっていった点からいって、異文化受容や変わりゆくジェンダーの視点で意見の交換ができることを授業目標に設定して作品を選択した。選択した作品は以下の通りである。

1. 夏目漱石『三四郎』(1908)
2. 与謝野晶子『みだれ髪』(短歌)(1901)
3. 芥川龍之介『手巾』(1916)
4. 川端康成「化粧」(『掌の小説』)(1971)
5. 三島由紀夫『煙草』(1946)

これらの作品は2018年度の選択を引き継いでいる。2018年度の学期末に行ったアンケートで、受講者25名に作品に興味を持てたかどうかを5段階で聞いたところ、すべての作品において7割以上の受講者が「非常に」もしくは「かなり」と回答しており、コメントにも「有名な作家の作品だったので楽しかった」「意外な結末が面白かった」「共感した」「短歌に興味を持った」などが見られたためである。

作品の選択に際しては、リボン(『三四郎』)、化粧(「化粧」)、ハンカチ(『三四郎』と『手巾』)、たばこ(『煙草』)という、近代を象徴し、場面において効果的な役割を果たすアイテムが含まれていることも意識している。これらのアイテムをもとに時代背景や登場人物の心情などを学習者が視覚的にもイメージしていくことができると考え、以上の作品を授業で講読することにした。

4. 学習者の表現活動

4-1. ディスカッションとまとめシート

上記の作品の講読を通して、授業では学習者同士が自文化との違いを多方面から話し合って意見を分かち合うことを心掛けた。まず、『三郎』を通して日本が西欧という異文化を受け入れていく様子、近代女性の外見的、内面的な移り変わり、短歌ではそれを引き継いで女性の視点で恋愛感情を率直に表現することについて考え、自文化と比較して発表し合った。短歌については、最初に自文化の定型詩についての特徴を紹介し合った。また、「化粧」と『手巾』は内面の感情をありのままに表出しない日本人が書かれているため、ふたつを比較して読んで、この行動についてどう思うか、自分だったらどうかということを話し合った。最後に『煙草』は、同性愛的感情を含む若者の苦悩という題材が時代的、文化的に受け入れられるかどうかということが、話し合いのトピックとなった。

作品を読み終わるごとに、文中の表現はどのような意味か、作品に描かれた事柄、日本文化についてどう思うかなどを問う「まとめシート」を配布し、課題として提出してもらった。文学において表現の意味を問うことは、辞書的な言葉の意味だけでなく、背後にある登場人物の心情、状況、日本文化を問うことであり、答えはひとつとは限らないこと、比較やジェンダーなどの視点を交えて独自の意見を入れることを注意点としたが、シートには様々な視点で読み取った意見や感想が見られた。

4-2. 短歌の現代語訳

(1) 方法

作品ごとに学習者が内容や日本文化についての考えをまとめることは、文学を理解するうえで意義のあることである。しかし、意見を述べるだけでなく、作品にもっと深く関わる表現活動ができれば、学習者はさらに文学を身近に感じるができるようになる。そこで、短歌については現代語訳に挑戦した。山本(2012:171)は、短歌は助詞を学べることに加えて、「字数が少なく、象徴性の強い俳句に対し、心情を素直に表現する傾向が強い。

そのため短歌は心情を理解しやすい。」と述べている。文学の学習にも日本語の学習にも有用だと言えるが、理解だけでなくアウトプットによって作品をより身近に感じる機会を設けたい。活動としては短歌を作ってみることが考えられるが、決まりごとの多い定型詩を一から作るのは学習者にとってハードルが高く、また教師の指導および評価も困難であると考えられた。このような理由から、与謝野晶子の短歌「みだれ髪」を数首選んで現代語訳をすることにした。さらに俵万智による現代語訳、『チョコレート語訳 みだれ髪』を紹介し、解釈においても助けが得られるようにした。

まず、与謝野晶子の『みだれ髪』が生まれた時代と背景を紹介し、数首選んで観賞した。三十一文字から成り、五・七・五・七・七のリズムを刻むことを確認した後、ことばや古典文法について説明し、どのような状況、どのような心情をうたったのかを考えた。他の作品で恋愛やジェンダーについて考えたことと関連させて、この時代に女性があるのままに心情をうたうことについても話し合った。自文化の定型詩や、女性の表現活動についても紹介し合った。

『チョコレート語訳 みだれ髪』の現代語訳は、もとの歌と並べて比較しながら読んだ。ここでは大胆に場面や風物が現代に置き換えられていること、ことばが自由に選択されていること、もとの歌の語句を残して効果を出している部分もあることが確認でき、学習者は現代語訳に挑戦する時のヒントにすることができた。

(2) 学習者の活動

実際の作業に際しては授業で解説をしなかった歌を含む6首を挙げ、語句や文法の意味を記したハンドアウトとともに配布して、少なくとも3首は現代語訳することを課した。まず1首にクラス全体で取り組んだ。前年度はすぐに個人での作業に入ったところ、「これでいいか」という個別の質問が多く出たため、自信をもって自由に進めるために2019年度は最初に、歌に詠まれている心情を自分のことばに置き換えるとどのようなか考え、出てきた案を板書し、文字数(音)を数えて、話し合いながら語

句を修正するというように、皆で共有した。積極的に発言できない学習者にとっても、具体的なやり方が確認できる場になった。

個人の作業に入ると、最初は五・七・五・・・と拍で数えるという日本語の特徴をつかむのに苦労し、字余りや字足らずを気にしすぎて進まない学習者もいた。しかし、こつをつかむと、古典文法を使ってみる余裕も生まれた。視点を変えて訳したものもある。解釈を変えてしまったもの、ほぼ創作に近いものもあったが、リズムに乗せてことばを産出することを重視し、訳し直させるということはしなかった。

印象的なのはオノマトペと終助詞（「女ことば」としての終助詞を含む）を使用していたことである。「さらさら」「すべすべ」「つやつや」「ぐちゃぐちゃ」「ボサボサ」「こっそり」「わくわく」「ふらふら」などのオノマトペは、特に授業で扱ったわけではないが、現代語訳に取り入れている学習者が多かった。また「～だよ」「～だね」「～な（あ）」などの終助詞もよく見られた。字数をそろえるためということもあるが、詠み手の気持ちになって心情を伝えようとする工夫が見られた。特に女性の詠み手を意識していることは、「～の（よ）」「～かしら」など女性が使用するものとして学習しているはずの表現を意図的に入れていることから窺えた。また、「～ちゃった」などのくだけた表現も見られた。

現代語訳は、冊子『名大訳 みだれ髪』として配布し、授業内で1首ずつ自分の訳した歌を音読してもらい、皆で鑑賞した。完成版にも文法的な間違いや意味の通らない部分が見られるが、教師側で訂正をせず、最終稿をそのまま印刷して配布し、鑑賞時にアドバイスするに留めた。以下に学習者の現代語訳の例を紹介する。もとの歌を〈みだれ髪〉、俵万智訳を〈チョコレート語訳〉、学習者の訳を〈学習者訳〉と記す。

〈みだれ髪〉

髪五尺ときなば水にやはらかき少女ごころは秘めて放たじ

〈チョコレート語訳〉

たっぷりと湯に浮く髪のやわかき乙女ごころは誰にも見せぬ

〈学習者訳〉

ロングヘア水にさらさらほどけ浮く おとめ心は告白せずに
長い黒髪 水中にとけばさらさらと少女のきもちうちあけられぬ
長い髪見ずにさらさらういている女子というのは意志を明かさず
長髪の泡流しつつ見せたくない乙女心も滴り落ちる

〈みだれ髪〉

やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君

〈チョコレート語訳〉

燃える肌を抱くこともなく人生を語り続けて寂しくないの

〈学習者訳〉

女性を知らないままにすぎてゆく若き熱さよ道も分からぬ
スムーズ肌暖いボディさわらずにさびしくないの道を説く君
さびしいなあなたの姿わかいのにすべすべの肌さわりもしない
あたたかなつつや素肌触れもせず哀れな君は恋歌を書く

〈みだれ髪〉

みだれ髪を京の島田にかへし朝ふしてゐませの君ゆりおこす

〈チョコレート語訳〉

朝シャンにブローした髪を見せたくて寝ぼけまなこの君ゆりおこす

〈学習者訳〉

久しぶりにネイルを作った寝ている君を起こして見せてすてきじゃないか
散らし髪綺麗に結び「これでどう」となりの君に尋ねる朝
起床早々ボサボサな髪お団子ヘアに結ったけれど君すやすや寝てる
寝起き顔ちゃんと化粧してきれい朝寝ている君を驚かせたい

〈みだれ髪〉

しのび足に君を追ひゆく薄月夜右のたもとの文がらおもき

〈チョコレート語訳〉

そっとそっと君についていく月の夜 重たいほどの手紙抱えて

〈学習者訳〉

音をせず君を追っていく淡い月右のポケットの手紙重く
暗い夜君が知らずに尾行するすぐ渡したいこの手紙をね
おとせずに君を追いかけてこのよるはかくしたてがみがおもくかんじる
こっそりと君の跡に沿い月光の下右袖の手紙君に届けるの
そっと出て君を尾行し月が照るもう用済みの手紙が重い

〈みだれ髪〉

なにとなく君に待たるるこちして出でし花野の夕月夜かな

〈チョコレート語訳〉

なんとなく君が待ってる気がしたの花野に出れば月がひらひら

〈学習者訳〉

わけもなく私を待てるのわくわくと花野に出ると月が昇っていた
どことなく君に会えると感じがして向かった公園自分の影だけ
君がいるいつものところにとまって月のある花野にやってきた
気のせいか君が待つような気がしている宵月が浮くあの花園に
なにかしら君が待っていると気になって迎えに行くと東京の夜景

〈みだれ髪〉

おもぎしの似たるにまたもまどひけりたはぶれますよ恋の神々

〈チョコレート語訳〉

彼に似た人にまた会いまた惑う恋の神さまはいたずらが好き

〈学習者訳〉

面影が似ているだけで何度もと惹かれてしまい意地悪いのよ
神様のいたずらだよねもう一度似ている人に恋に落ちちゃった
心ぎゅっと似た顔を見てまた惹かれたいたずら好きかい愛のキューピット
顔つきがそっくりの人にまたハマる試練を与える意地悪な神

横顔はまるで瓜二つ悩ませて振り回されて運命のいたずら

5. 学習者の反応

授業の最後に受講者にアンケートを行い、授業でとりあげた文学作品に興味を持てたかどうかを「非常に興味がある」を5、「あまり興味がない」を1とした5段階で答えてもらい、17名の回答を得た。結果は以下のとおりである。

興味を持てたか 作品名	5	4	3	2	1
三四郎	0	11	5	1	0
短歌	6	4	4	3	0
手巾	1	6	6	3	1
化粧	5	3	6	2	1
煙草	8	4	4	0	1

(人)

全体を見ると、興味を持てた受講者が多い傾向にあるものの、非常に興味を持ったとは言い難いかもしれない。2018年度はすべての作品に70%以上の人が「興味を持てた」（4か5）と回答したのに比べると減少している。しかし、アンケートを個別に見ると、すべての作品に3をつけた1名を除き、いずれかの作品には5または4をつけている。例えば短歌には5をつけたが『煙草』には1をつけた回答者、『三四郎』には4をつけたが短歌には2をつけた回答者、『煙草』にも短歌にも5をつけたが「化粧」には1をつけた回答者などがいた。すべてに1または2をつけた人はいなかった。つまり、全般的に興味を持てなかったというより、作家、作品に対する好みが分かれたということがわかる。「授業でとりあげてほしいこと」として、太宰治、島崎藤村、江戸川乱歩の作品を扱ってほしいという回答や、夏目漱石の『吾輩は猫である』、芥川龍之介の『羅生門』を読みたいという回答があったことから、今回選択した時代やジャンル、有名な作家や作品が興味から大きくはずれているのではなく、むしろ文学の基礎知識があり、読みたい作品があることもわかった。

表現活動として現代語訳を試みた短歌については、以下のような肯定的、意欲的なコメントが見られた。

- ・日本に来る前から百人一首に興味を持っているから、短歌は好きです
- ・恋愛の短歌ですから面白かったと思います
- ・自分の言葉に変えるのは楽しかったです
- ・ちょっと読みにくいけど、いろいろ勉強になった
- ・古文に興味を持っていますので、古い日本語を使っている短歌を読むとつい訳してみたくになります

もともと短歌や古文に興味をもっている学習者もいたが、そうでない学習者にとっても、作品に対して意見を述べるだけでなく部分的な創作とも言える現代語訳を行ったことで、達成感を味わうことができ、文学を身近に引き寄せた感覚があったのではないかと思う。コメントにもあるように、テーマが恋愛であったことも学習者の興味をひき、現代語訳に集中できる要因になったようである。

テーマに興味を持ち共感したという点では『煙草』を挙げる学習者も多かった。5をつけた回答には以下のようなコメントが添えられていた。

- ・人間の複雑なところが描かれておもしろい
- ・ちょっと読みにくいけど、作者は風景や人の気持ちに対する描写がすごく上手なので、面白かった
- ・比喩もたくさんあるし、小説の意味は深くて重いから
- ・心理的な描写が多いので、日本人の繊細さがもっと理解できる
- ・わかりやすく、読みやすかったです

授業中は難解で読みにくいとの声が上がっており、テーマも議論しづらいところがあるのではないかと考えていたため、『煙草』を挙げた学習者が多かったのは意外であった。コメントでは比喩や描写などにも言及して

おり、「作品を味わい、楽しむ」という本授業の目標が多少なりとも達成されていることがわかる。作品を選択した時点では、ストーリーに意外な結末がある『手巾』と「化粧」のほうが「楽しめる」のではないかと考えていたが、学習者の反応は逆で、特に「手巾」にはあまり興味をひかれず、学習者にとっての「読みやすい」「わかりやすい」とは、明確なテーマや単純なストーリー展開、平易な文章ではなく、人間の心理がいかにか描かれるか、そしてそこに自分の感情をいかに添わせることができるかによることを教えられた。その意味では、今後はあらかじめテーマを縛るのではなく、登場人物の年齢、性別、行動、心理の描写のしかたを作品ごとに丁寧に拾って、講読作品を決定することも必要であろう。

6. まとめと今後の課題

本稿では留学生に向けた文学の授業に向けて留意し実践したこととその結果を、作品の選択と表現活動を中心に報告した。ライトノベルが海外でも読まれるようになり、留学生たちからの現代文学を読みたいという要望は依然として強い。しかし近代にも視野を広げて皆で作品を読み、意見を分かち合うことは、日本語、日本文化への興味と理解を深めることにつながると考える。ただし、作品の選択の際には、テーマの一貫性や教師が考える「読みやすさ」とらわれず、難解と思われても学習者が挑戦し考える機会を損なわないようにする必要性を、2019年度の授業と学習者の反応を通して実感した。古文や、読者自身がテーマを見出していけるような作品も視野に入れていくことが大切だと考える。

学習者のアウトプットについては、意見を口頭や文章で述べ交換することも有効であるが、学習者はより創造性の高い活動を求めていることがわかった。文学を専門としない学習者、創作が苦手な学習者にとっては、「翻訳」という作業が時間的にも心理的にもそれほど大きな負担を感じずに行える表現活動であったと思う。

活動においては、流れを止めずモチベーションが損なわれないように配慮する必要がある。型にはまった読み方や書き方に導くことは避け、なる

べく学習者の表現を尊重したい。しかし、留学生向けの文学の授業は、文学を味わう機会であると共に、日本語文法や表現を身につける機会であることを忘れてはならない。今回の実施においては、日本語を正確に書くことを向上させるという点に比重が置けなかった。教師とのやりとりやピアラーニングを通して表現を推敲する時間を増やし、日本語能力も共に高めていくことが、今後の課題である。

注)

- 1) 名古屋大学国際言語センター日本語・日本文化教育部門ホームページ：入門講義「目的」参照 <http://jp.ilc.iee.nagoya-u.ac.jp/ja/japanese/course/introductory.html>
- 2) 同「受講資格」参照

参考文献

- 西昌樹(2012)「教材研究 授業報告：留学生の現代日本文学入門」『メディア・コミュニケーション研究』62, pp.51-58, 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院
- 二本松泰子(2010)「留学生が学ぶ『日本文学史』の授業研究 日本文学研究入門科目としての一試案」『大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究』8, pp.35-53, 大阪大学日本語日本文化教育センター
- 山本裕一(2012)「短大留学生における文学教育の一つの試み 短歌を教材として」『別府大学短期大学部紀要』31, pp.163-176, 別府大学短期大学部

